

2007年9月22日(土) 午前10～12時

大阪大学文学研究科考古学研究室

長尾山古墳第1次調査 現地説明会資料

はじめに

大阪大学考古学研究室は、宝塚市教育委員会の協力を得て、8月末より兵庫県宝塚市山手台に所在する長尾山古墳の測量・発掘調査を開始しました。その結果、古墳の形と規模、さらに古墳に伴う埴輪から古墳築造時期が推定できました。本日はその成果を現地にて公開させていただきます。



大阪国際空港をのぞむ長尾山の被葬者

1 調査の目的

およそ3世紀中葉から7世紀にあたる古墳時代の歴史を解明するためには、奈良県や大阪府南部に所在する巨大な古墳の分析だけではなく、地域の古墳の動向を調べることも重要です。大阪大学考古学研究室では、25年以上にわたって古墳の発掘調査を行ってきましたが、近年は西摂・猪名川流域(兵庫県南東部～大阪府南西部)をフィールドとして古墳時代に活躍した地域の首長の墓である古墳の動向を継続的に調査、研究しています。

猪名川流域の地域には、古墳時代前期から終末期にいたるまで数多くの古墳が築造されています。しかし、古墳の分布と時期を検討すると、豊中台地(豊中市中部)、待兼山丘陵(豊中市北部・箕面市西部)、猪名川左岸から北摂山塊にかけての池田(池田市)、猪名川中流域の猪名野(伊丹市)、そして長尾山丘陵(川西市・宝塚市東部)といったエリアで、古墳の築造に盛衰が認められます(図1)。

古墳時代前期(3世紀中葉から4世紀後葉)には、豊中台地に大石塚古墳(11、以下の番号は図1に対応)と小石塚古墳(10)、待兼山丘陵に待兼山古墳(8)と朝田御神山古墳(9)、池田に池田茶臼山古墳(5)と娛三堂古墳(4)、猪名野に池田山古墳(23)、宝塚市中部には安倉高塚古墳、そして長尾山丘陵に万籟山古墳(2)が築造されています。古墳時代前期を4つの時期に区分すると、池田茶臼山古墳、待兼山古墳は副葬品や埋葬施設、埴輪からすこし古く位置付けられますが、おおむね3期にそれぞれのエリアに古墳が築造されていることがわかります。一方、古墳時代中期(4世紀末葉から5世紀末葉)になると豊中台地では豊中大塚古墳(12)、御獅子塚古墳(13)など、猪名野では伊居太古墳(25)、御願塚古墳(19)など古墳が引き続いて築造されますが、池田や長尾山丘陵では古墳は築造されていません。こうしたありかたは、猪名川流域の各地域の首長層の盛衰をあらわしていると考えられますが、背後には中央政権との関係の変化や中央政権内部での権力交替が影響した可能性があります。

このことを明らかにするためには、各地域ごとの古墳の築造時期や内容を把握することが必要です。しかし、この長尾山古墳にかんしては発掘調査が一度も行われていないため、これまでは漠然と4世紀末から5世紀初頭かといった築造時期が推定されてきたにすぎません。そこで大阪大学考

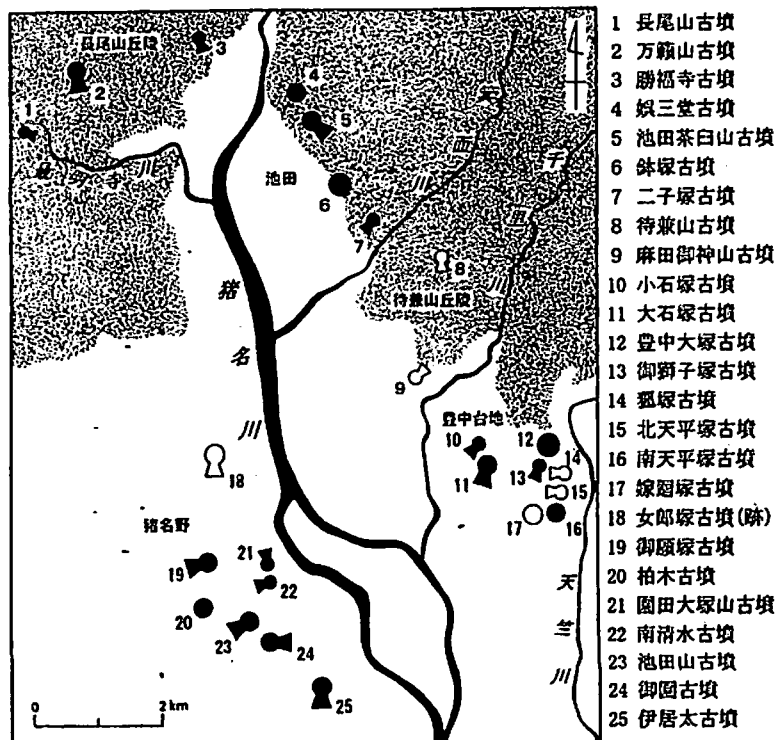


図1 猪名川流域の主要な古墳(白抜は時期不明)

古学研究室は、猪名川流域の首長系譜を考えるうえでの基礎資料を充実させるため、今年度から長尾山古墳の測量調査・発掘調査に着手しました。 (中久保辰夫)

2 長尾山古墳調査略史

長尾山古墳は1960年代までは前方後円墳と考えられてきましたが、1969～70年に行われた宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学考古学研究会の測量調査により、前方後方墳である可能性が指摘されました。この時の調査では、墳丘の規模が長さ36m程度と推定され、また古墳の頂上部分に埋葬施設の一部が見えていたとされます。しかしその後、発掘調査をはじめとして調査はいっさいなされておらず、正確な墳形・墳丘規模や時期など、その全容は謎に包まれたままでした。長尾山古墳の存在は、前述のように古墳時代の歴史、猪名川流域の歴史を探るうえでも重要なポイントとなります。大阪大学考古学研究室では、2000～2004年にかけて行った川西市勝福寺古墳の調査において6世紀の長尾山丘陵の様相を明らかにしましたが、これに引き続いて、長尾山古墳についても測量・発掘調査することにしました。 (田中由理)

3 古墳の形と構造

今回の調査により、墳丘^{はんきゅう}について新たな事実がいくつも判明しました。以下にくわしく説明します。

形の手がかり まず、墳丘測量の結果、図2の測量図中央付近で標高^{ひょうこう}116～118mの等高線^{とうこうせん}が間隔をせばめ、南東側へ広がる様子が確認されました。ここより北側では標高121m付近で平坦面が形成され、南側では緩やかな傾斜が続くことから、北側が後円部、南側が前方部であると想定されました。前方部東側の117.5m付近で地表検出された^{もといし}葺石の残存と考えられる礫の並びなどもこの想定を裏付ける根拠となります。

また、発掘調査の結果、各調査区で葺石^{もといせき}の基底石が検出され、とくに西クビレ部や前方部の調査結果から長尾山古墳が少なくとも二段以上の築成であることが明らかになりました。各段の標高は前方部では一段目が116m付近、二段目が116.5m付近にあたり、西クビレ部で一段目がおおよそ117m付近、二段目が117.5m付近、後円部ではおおよそ117.5～118mにあたりと考えられます。

古墳の形については、葺石が良好に残存していた西クビレ部第1・2トレンチでの成果が注目されます。西クビレ部第1トレンチでは前方部のクビレ部付近に相当すると考えられる基底石の列が検出されました。西クビレ部第2トレンチでは基底石が北西側に円弧を描いて広がる様子が観察され、後円部に相当すると考えられます。両調査区で検出された石列の位置関係から、この古墳が前方後円墳であることがほぼ確実になりました。

規模の手がかり 続いて古墳の規模ですが、前方部第1トレンチでは前方部の端と考えられる石列が検出されており、古墳の南側の端を確定することができました。後円部第1トレンチでは原位置からやや流出しているものの、葺石どうしが組み合った状態をよく保った礫群が多数検出され、この礫群よりも上方(南側)に本来の後円部の北端があったことが推定されます。この二ヶ所の調査地点の成果から、古墳の墳丘長が約38mであることが判明しました。 (高上 拓・野島智実)

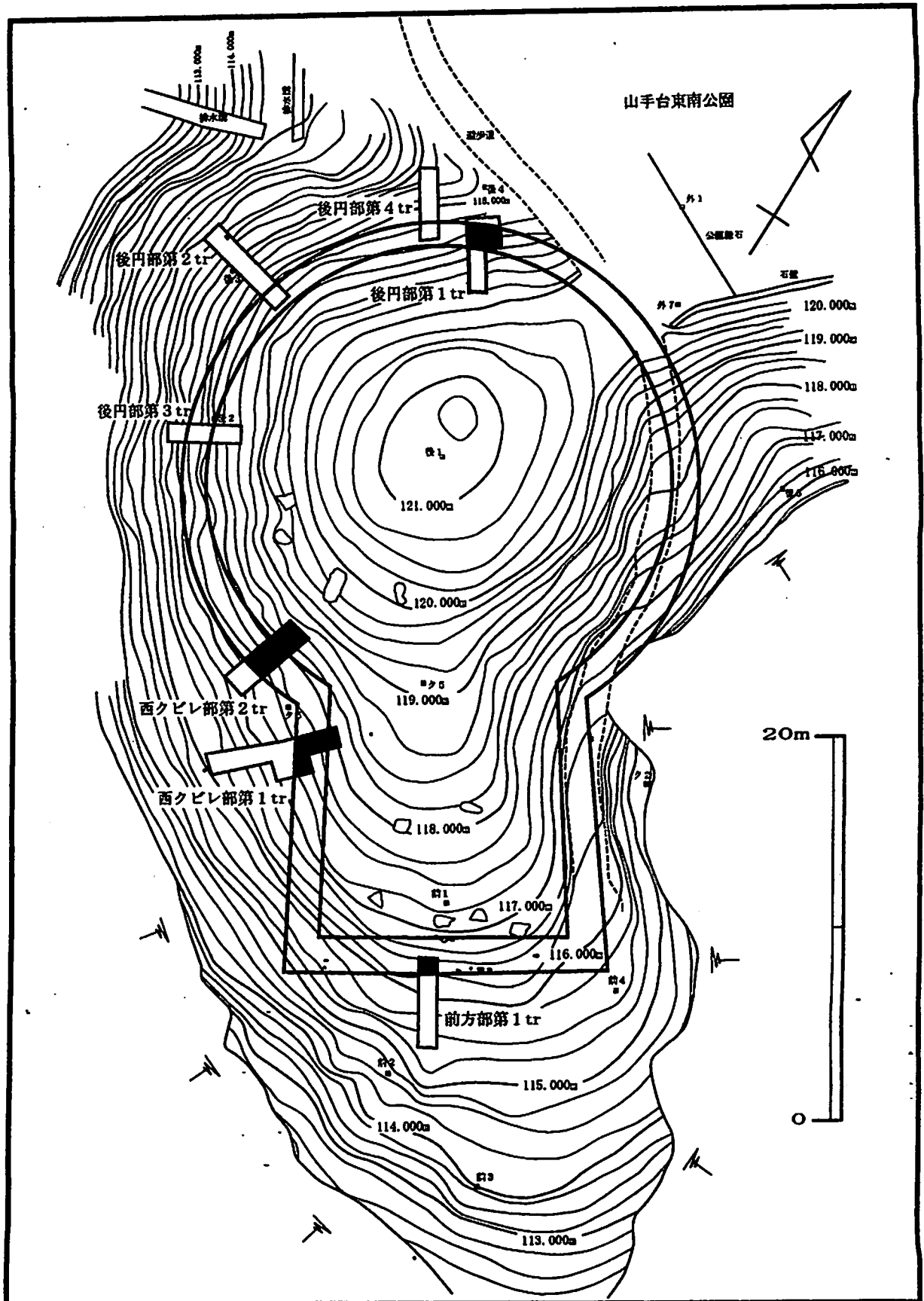
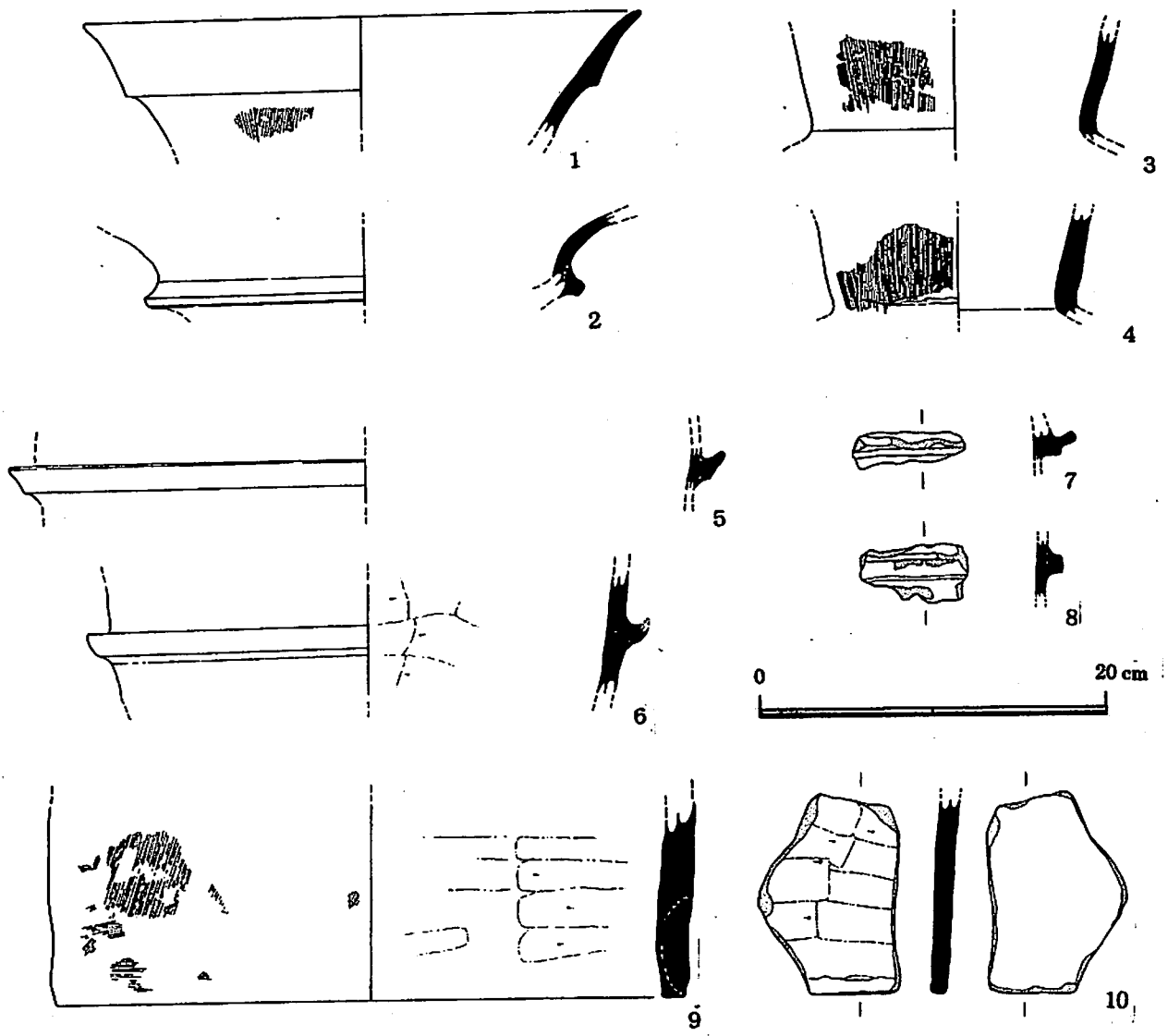


図2 長尾山古墳測量図(S = 1/300)とトレンチ配置図



口縁部：1、2. 西クビレ部第1調査区 頸部：3. 後円部第1調査区 4. 西クビレ部第2調査区
 突帯：5. 後円部第1調査区 6. 西クビレ部第2調査区 7、8. 西クビレ部第1調査区
 底部：9. 西クビレ部第1調査区 10. 後円部第1調査区

図3 長尾山古墳出土埴輪 (S=1/4)

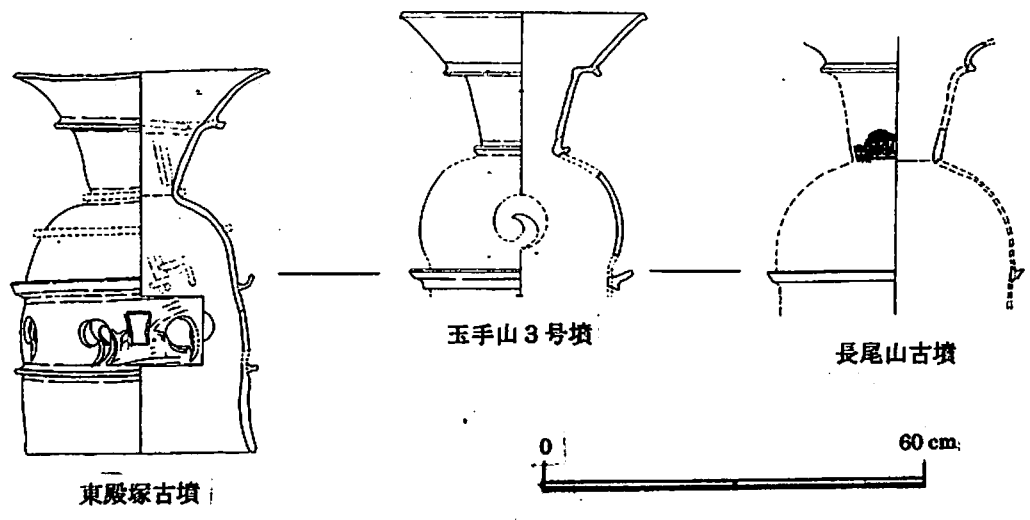


図4 古墳時代前期中葉の朝顔形埴輪 (S=1/12)

6 まとめ

今回の発掘調査により、これまで実態が不明確であった長尾山古墳が猪名川流域では最古の前方後円墳であり、葺石と古相の埴輪をそなえていることが判明しました。これにより、従来の周辺古墳の調査成果とあわせて猪名川流域の古墳時代政治史のほぼ全体像をとらえることができるようになった点に大きな意義があります(図5)。

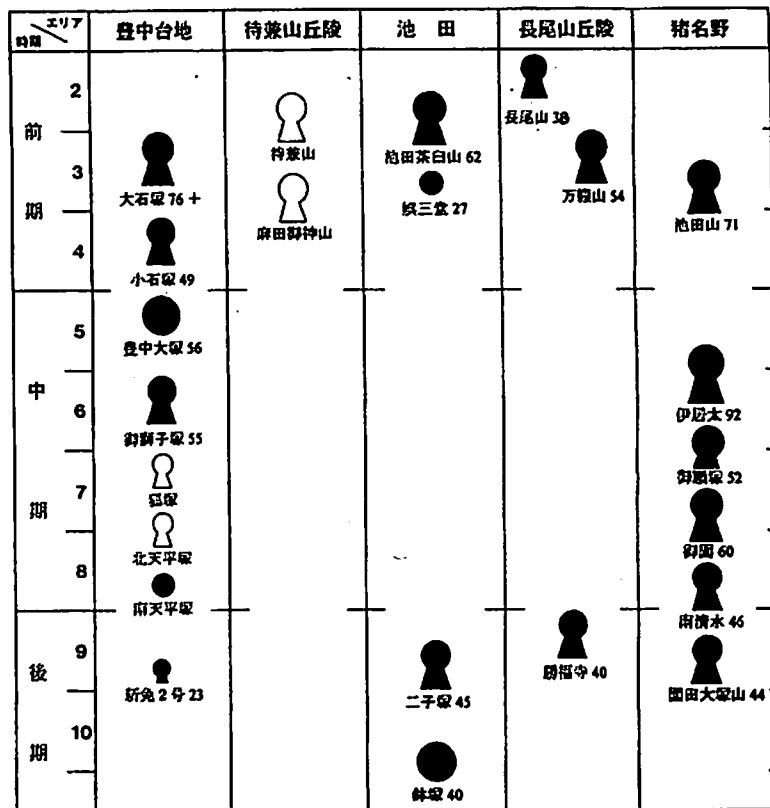
しかも、以下に述べるように、この地域の諸勢力の推移が大和政権内の主導権争いとも連動していた可能性が高まり、日本列島全体の古墳時代史を解明する有効な地域研究が期待できるようになりました。

〈古墳時代前期：大和政権との連携の始まり〉 猪名川流域では古墳時代前期(4世紀)の有力古墳は、支流の小河川に隔てられた豊中台地(豊中市桜塚古墳群中の大石塚古墳/前方後円墳/76 m、小石塚古墳/前方後円墳/49 m)、待兼山丘陵(待兼山古墳/前方後円墳?/60 m程度)、池田市域(池田茶臼山古墳/前方後円墳/62 m)、長尾山丘陵(万籟山古墳/前方後円墳/54 m)などにそれぞれ営まれていました。これら諸首長の先陣を切って、前方後円墳という大和政権の葬送儀礼をいち早く受け入れたのが長尾山古墳の被葬者なのです。

〈古墳時代中期：台頭する河内勢力との連携〉 しかし、猪名川流域の各首長系譜では古墳時代中期(5世紀)になると、各地に点在していた有力古墳は途絶え、南の猪名川中流域の豊中市桜塚古墳群と伊丹市南部から尼崎市域に広がる猪名野古墳群にのみ有力古墳が集中して築造されるようになります。桜塚古墳群や猪名野古墳群は、5世紀に大和政権のなかで主導権を握った河内の勢力と緊密な関係をもって地域内で勢力を増したと考えられます。

〈古墳時代後期：継体大王の登場と系列の交替〉 6世紀前葉になると、桜塚古墳群や猪名野古墳群は衰退傾向が顕著となり、これと入れ替わるようにふたたび猪名川上流域の長尾山丘陵や池田市域に勝福寺古墳や二子塚古墳などの有力古墳が現れます。これも6世紀前葉に大和政権の主導権をあらたに握った「継体大王」の登場によって有力地域首長の系列が変動したものととらえられます。

(福永伸哉)



(白抜きは墳形や時期が未確定)

図5 猪名川流域における首長墓の盛衰

7 今後の課題

今年度の調査では、上記のような様々な成果をあげることができました。

ただし、今回は主に墳丘西側に調査区を設けたにすぎません。古墳の詳細な形態の情報を得るためには、墳丘の東側や墳丘上部の段築のありかたを解明しなければなりません。

また、30年前の観察では後円部墳頂に粘土槨が露出していたと指摘されています。現状では、そのような痕跡は確認できませんが、この埋葬施設の残存状況を確認することも、今後に残された大きな課題といえます。

長尾山古墳は猪名川流域に残された数少ない前方後円墳であり、何よりも山手台東南公園に隣接した誰もが気軽に立ち寄る場所に立地しています。古墳からは眼下に大阪国際空港、そして梅田や難波のビル街という 21 世紀の街並みとともに、生駒山から二上山に続く山並み、そして大阪湾と淡路島という 1700 年前と変わらない景観が共存しています。この素晴らしい景観とともに貴重な古墳を保存しつつ、適切な歴史的評価を与え、地域の文化財として活用していくお手伝い出来ることを願っています。

(寺前直人)

8 謝辞

今回の測量・発掘調査にあたって宝塚市教育委員会、宝塚市公園課、櫻守の会、山手台東自治会、小浜自治会のご協力を賜りましたことに感謝申し上げます。(調査団一同)